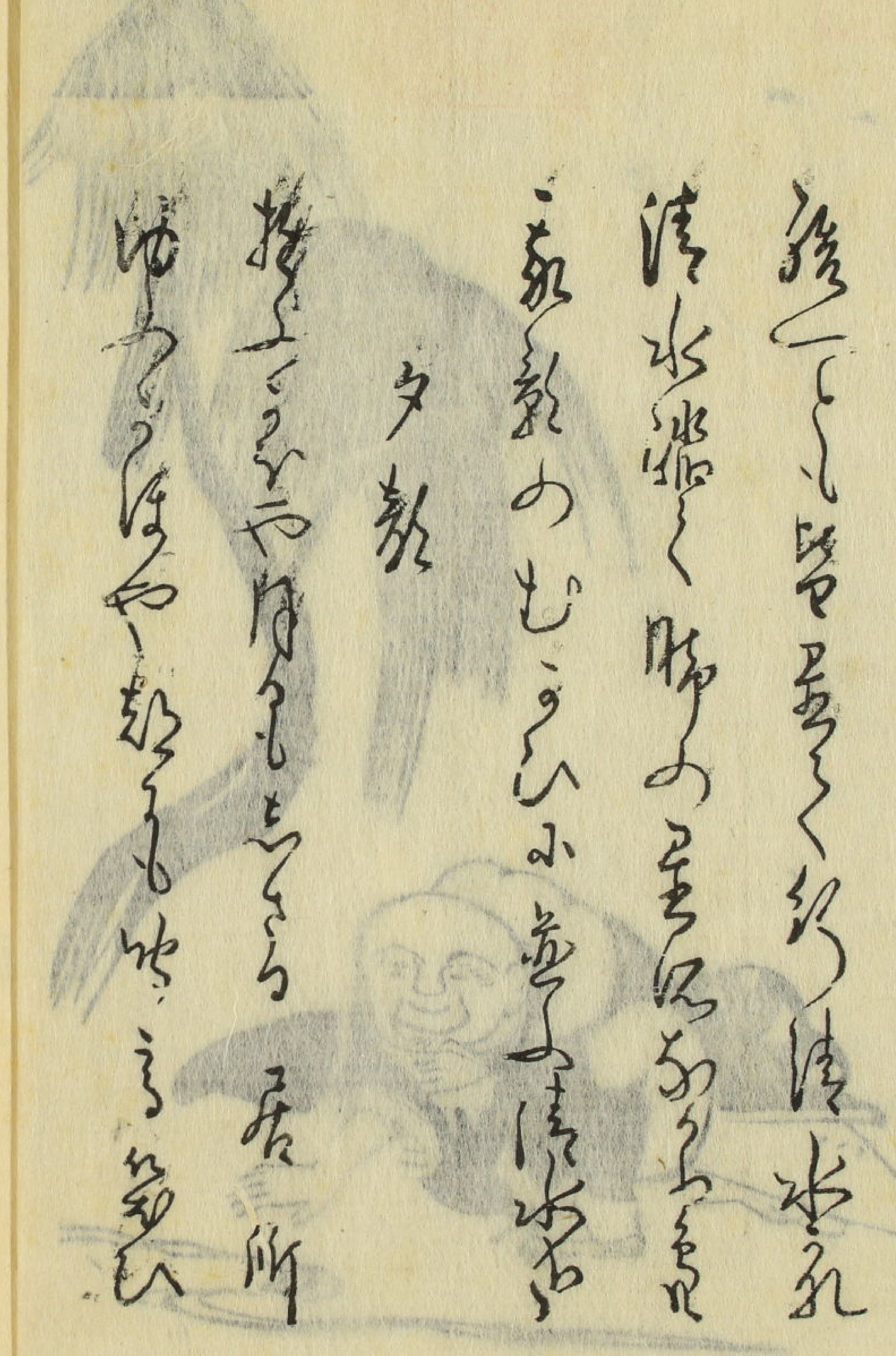
續千代尼句集 下

へ 5
2245
2

門 へ 5
2.245
2 上



れところもしらぬ春に涼しみけれ
緒にしも露をく紀の清水哉
清水流るゝ勝の色見ゆる山も見
二家数のむすびに為る清水哉

夕顔

撫子に花や月もしらぬ居所
帷子のほつれや額も映る笠銀八

ゆふへや宗祇も背を行車
〃 吉隣

盛えて四文気たちの業
鳥つおもく消る雲の如き泳
雲の峯おもう雲の古き行盛

氷室

君らの杵つくは男や氷室守

かくこその 黄昏あひつつ 出かけ
松風のきおふてつる 風流しくのれ
百 ものれ
あそ後ちれ さ刻して 一日 只れ
餞別 四句
道よそる 清水の 弥勒 こそよの菊
清水も 遠く 道や 帰る 浪路
昨日ミも 出船の 道や その舟
照もるし 傘し 夏衣 まさくら

秋部吟

初秋

きのふとく今日も又知る今朝の秋
秋来ぬと唯秋来ぬと思ひけり
あき風や桐あらはする庭の中
紅らくて又明けぬのゝしき今朝の秋

七夕

みれ星も仰もつる織女の糸
願ひ糸の数年にかく星まつり
りまや雨おもふまゝ星の一夜かぞ
かしの名あゐ寄りもなく袖袂
星のつれ鶴も寿の節なり
世の中は

とまれへしもつれ妻う嘆す家
世を御らん清れて行んとしけつさきて
つらむ毎を御とまのむつや世御は
なの嬰く津み翁家の手向
文塚や無きの?くとまれへし
王祭
たちへのえいのせくさらつ槐まう

槐まれを水み油きへつれまか
正榮
あさうの果や菊しく寂しく花落る石
新さるや歩りきさ訪し許律
なきも新や蝶のお経をしる暮して
稲葉
いまはや御のとしま家ものにけ

いなつまや神となりて神の風

康

かくあるも鹿の経の暇もなし

啼し鹿の声の妙なるも哀れ

もろこしや寒山拾得の鹿比叡

人丸讃

わかのうらを知らぬ身を寒しと鹿の声

初雁や
いよいよ
あきのよ
長し
かゝり

かゝる日ぞかれくもじや一房の雲

也生

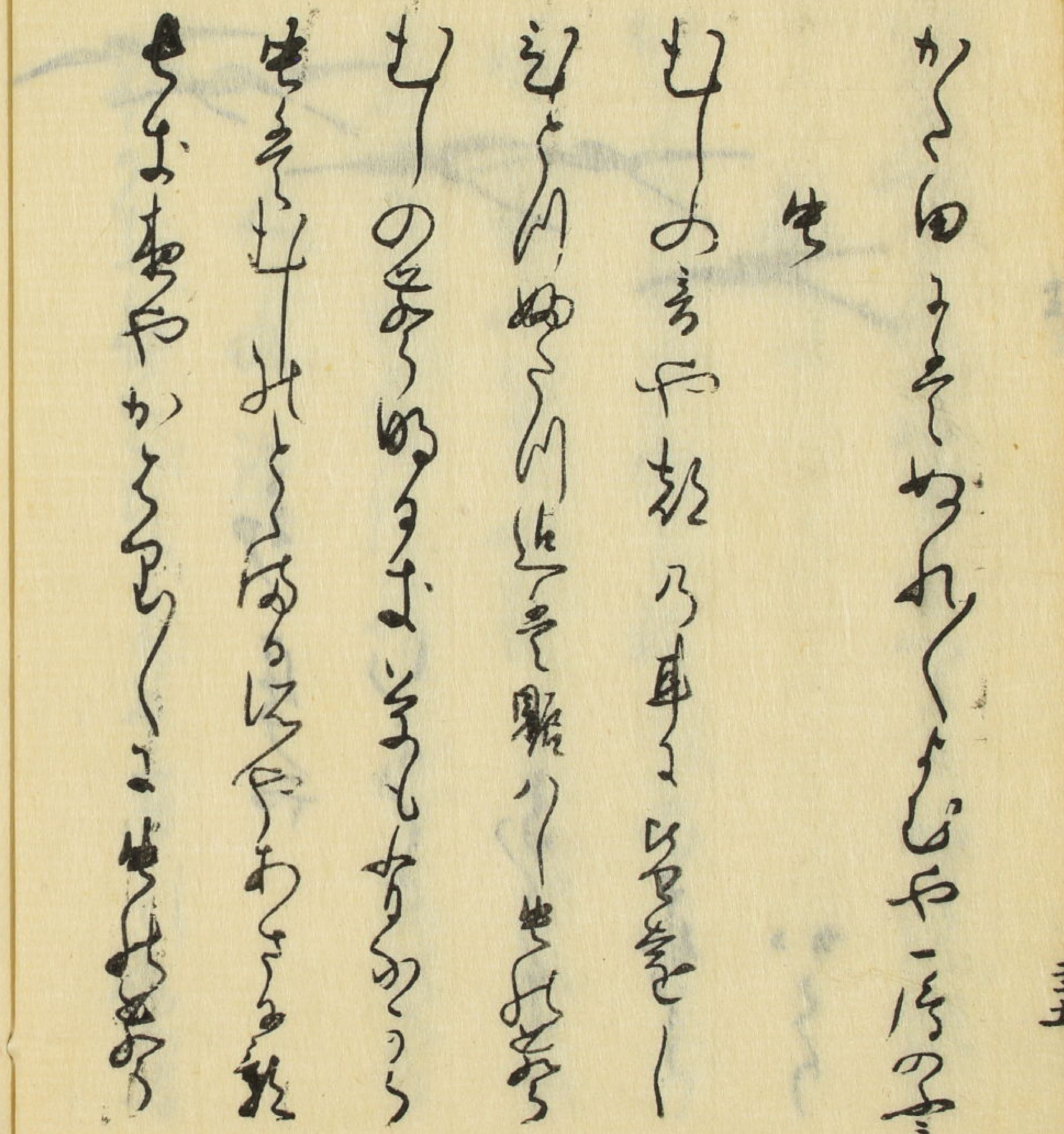
むしの音や放乃車ま音もなし

立ちて川嬉し川追る蘆八し也みせり

むしの音の噺すまふ音もすゞしつゝ

也きせみとる江やあさる乾

もよ声やかくらしさ也せる



花の鶴きてへ人へおくり哉

之房

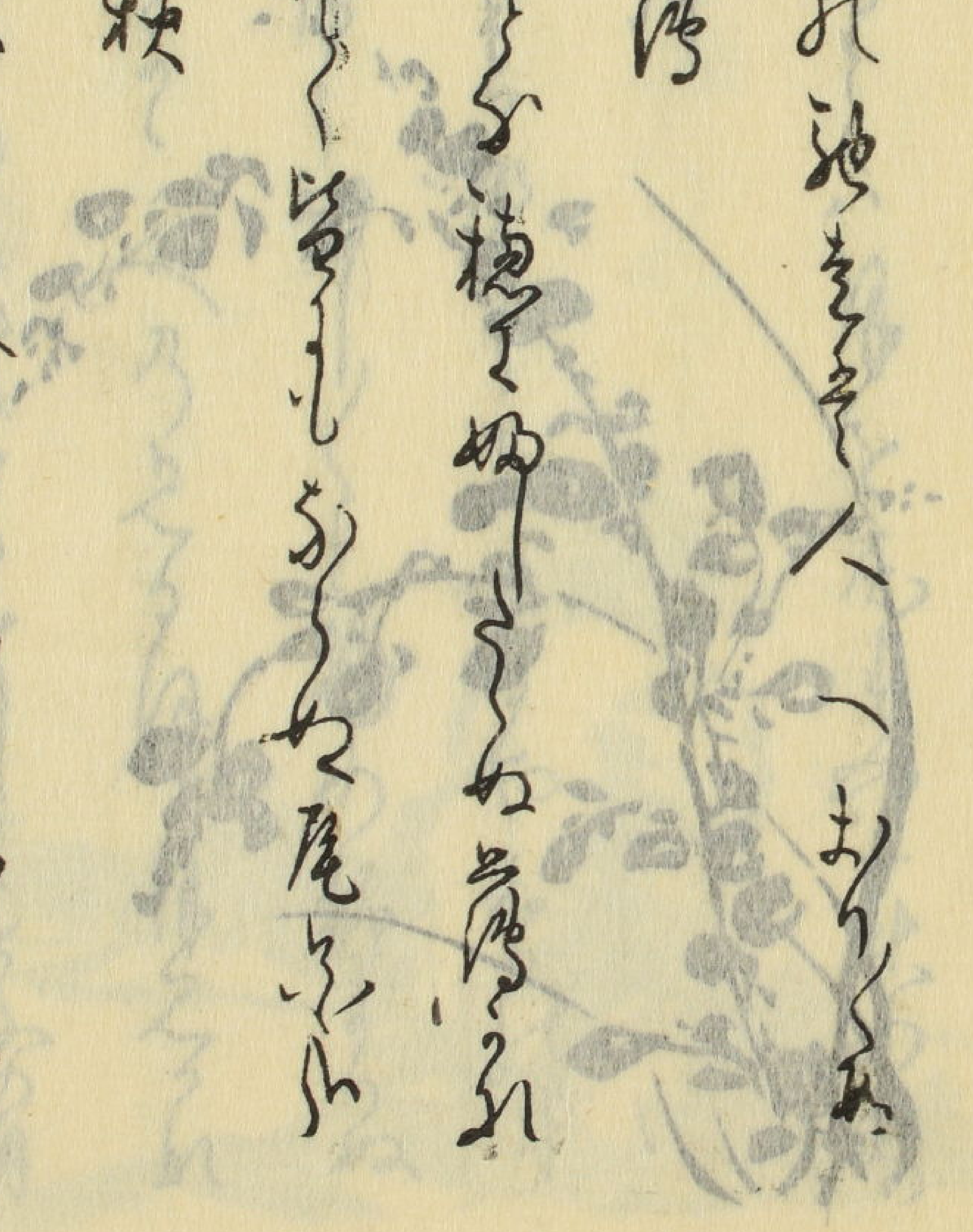
うれしさに橘て嬉しさの露乃れ

咲ものハ皆色ゝあり尾花にも

花秋

露の萩ゝ萩毎の雨や風とも

雨に濡て皆地にふる萩かな



わきてなくハ月を庭にや萩の露

月

星くもる野辺ゆく影やさやか月

ころもうつ聲しく檜の都まゐね

都ゆへて人のためにはてなくれ

こゝろよの木の葉もしほる夜の月

わか床のくまもしらぬ秋や今宵の月

杉むらくあらき風ても絶まの月
名月やなしま影もはなれ
月遠山やまたかね立ぬ紳
名月の帰る時は奉るし
さそはれて一夜ゐて月見るか
名もまたの月こよひ繁く見る眠

三条實萬

いさゝひやまさに遠くも見えぬらう
白山讃
名月や雪踏分る白山寺
北枝
月に照の扉をもしら北枝
こまらす水のちまた成北枝雑
蝶くみ落葉さらしてくもの風

萍 待
萍かすまやあつまし寄くまれ伴
芦 以
風を風子んも蜀屋あみなきに
達磨大師讃
面ろみもいそしの解くあり北枝

これ菊やりし咲ふとハ
わもとくみかわ

みとしのかゝへそうや菊の気
への世話くもつくしま菊合
菊さなみのあまり菊咲しきなよ
菊花やされいて植つる菊はなわ
あ人はくやいつまでも飛く秋の菊
小菊の色と何しなをくれまわ
菊はくや植る梅かりしもなし

十日にそゆかりのつまのあけの寒けれ

秋の暮

秋のおもかけ都の人に書伝へん
かけりし宮こみや官にも嫁の露
心ある身とならまし嫁入のころ

雁

暮くれ川や鈴をく人よ喜清のり

後月

後の月一夜にて世にあはし雲の
名の月覚のころかなし身にきら
田舎にもあはれ露の雫や名の月

紅葉

あさや先に落葉萩もみちのれ
色つき川色もし紅葉のころにみなれ

此ゆ鞍くるれはらめるなれ

明そうくはみ衣都ともみけれ

集しく来も鶴とまそ恋らるなれ

漁船

ともしし火乃ほく

夕されは舟も乃浦の秋

冬の哥

時雨

里くもる卯の峯はしくる時雨

晴くもりつゝ思ひ乱れしくれ

神しくれ水ませにしくるゝまゝ

去つ時雨見てしかまし新きゝけり

月まてしくれにゝそ中の影

親朝

ともに散るしくれの楽し

澤ぬはこをしに深く降むや冬時雨

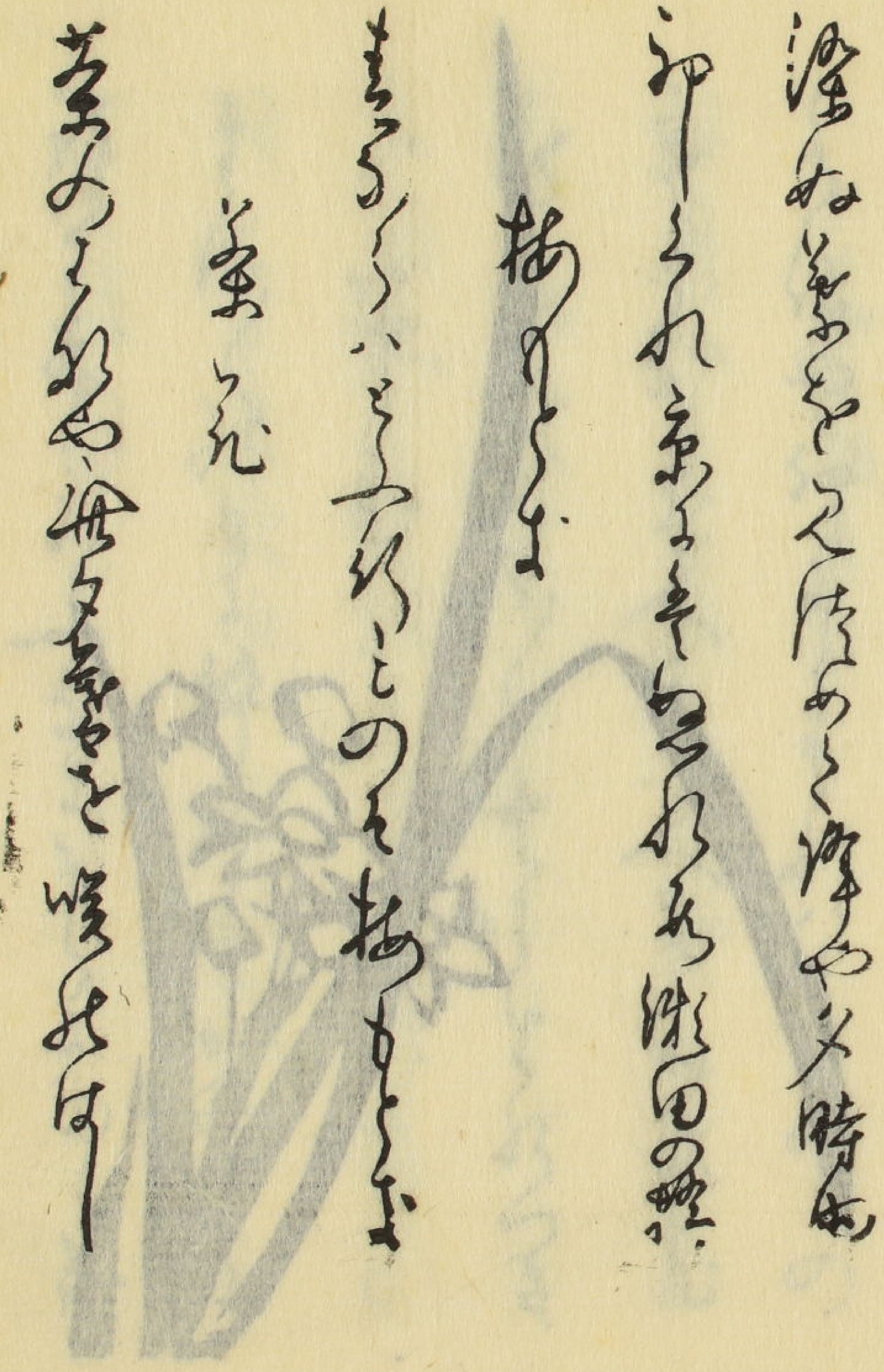
神しくれ京をよそに散る瀬田の橋

梅りしよ

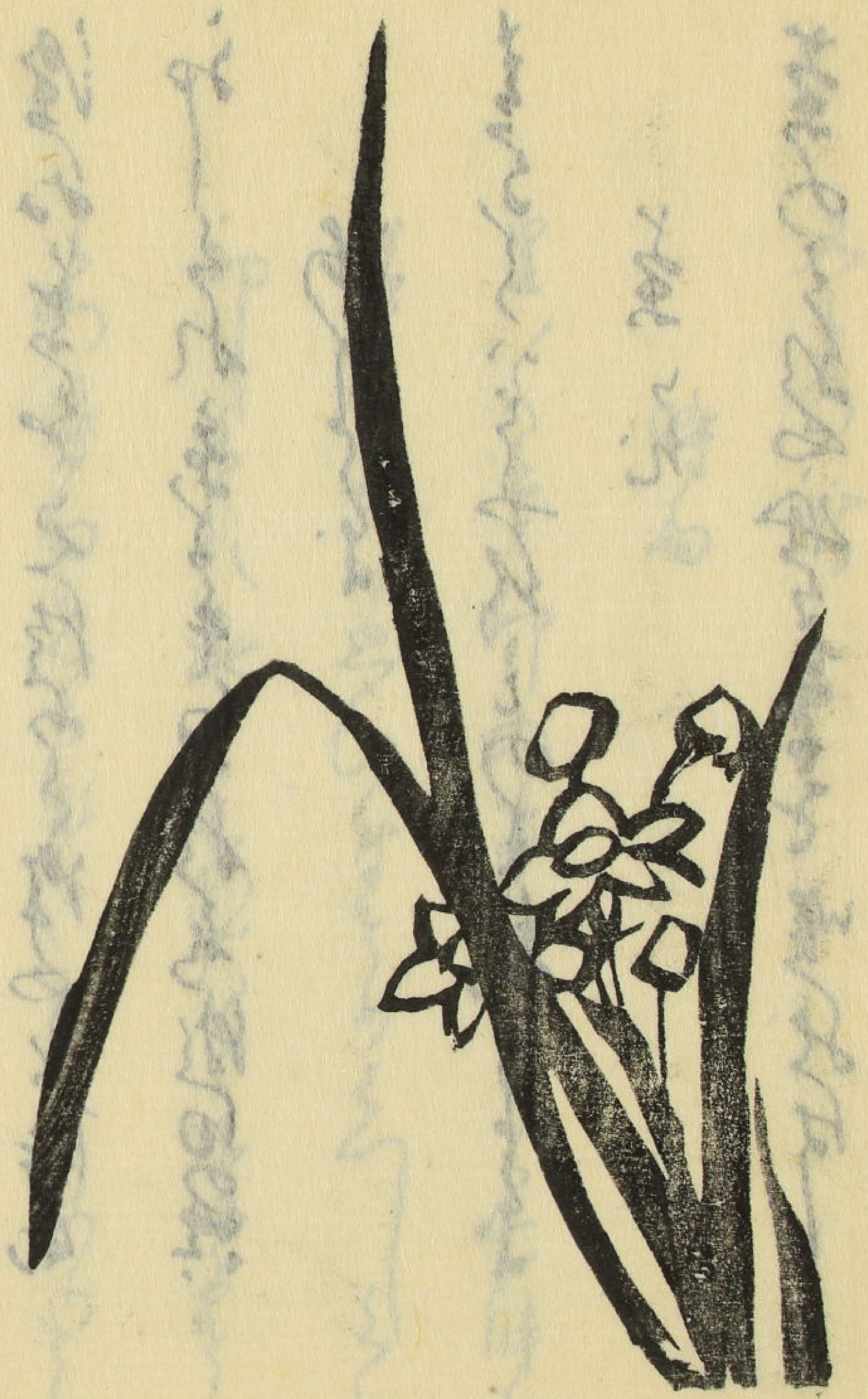
春まつくハ見る紅との色梅なるらむ

菜の花

菜のはなや無冬寒さを咲かはし



水仙や名を清からず数の中
ゑ仙や卯のとまれハ青みもの
宮しくちらしも人う人をゑ仙丸
水仙はさくらくきりはおつき
帰丸
まゆくみはよ砕外やかくらふ
済の声をあつ家まえしても丸



枯野

行かゝる枯野をはなれ庭のうつ

又ほそくちと打ちられ枯野かな

　　千春之

吹風のさむかれしや帰る故之

　　冬秋月

野人の手にかゝはれつ冬枯

戸ぬけて出ぬ寂やふりぬ月

　　よる

埋火乃まことそむかぬ[illegible]

諸[illegible]

かゝゆくみ[illegible]てはなし[illegible]

　　冬[illegible]

御手も[illegible]

寒

明烏よその音きゝも未たよ寒

鶏口は梅さゝの花の寒さかれ

頭巾　寿老人の賛

ゆきゝの仏も落葉や世頭巾

氷

おもの〳〵もみくよりつく氷の音

雪

初雪や新無く降れ有れりとて

大月雪や清き庭晴れむ雪道

初雪やこゝに初雪も一二寸

もつ梅や杉の花さそ晴よ

初雪や庭をたまふのちよ御

も川雪や笹乃跡にあゆみ跡

この庭は風のちらひや野の雪

ら終ふ人を見ふるころ人雪見人

さそひかく尻の立よ雪見人

果ぬまくもてあそびし野の雪

去梅

かくれなく梅桜誰と思ひ梅

嵐完

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文久三年癸亥初春發兌

發行書林

江戸大傳馬町 丁子屋平兵衛
尾張名古屋本町通三丁目 菱屋藤兵衛
京都冨小路三條上ル町 升屋勘兵衛
大阪堺筋通塩町北ヘ入 藤屋九兵衛梓